

知的障害養護学校におけるボール運動の授業実践

Ball exercise in the special school for children with intellectual disability

渡邊 貴裕*・丸井 曜子*・原田 純二*・小島 啓治*
國分 充**・奥住 秀之**

Takahiro WATANABE*, Yoko MARUI*, Junji HARADA*, Keiji OJIMA*
Mitsuru KOKUBUN** and Hideyuki OKUZUMI**

東京学芸大学附属養護学校*

要 旨

養護学校の体育は「生涯を通じた豊かなスポーツライフ（以下生涯スポーツ）の基礎を培う」という点で意義がある。障害のある人が日頃取り組んでいるスポーツ活動の一つとして「球技」があげられるが、養護学校の体育を考えていく際、球技のもつ集団性や競技性といった特性を楽しめるようになることは、生涯スポーツを目指すという意味でも重要である。ところが、日頃体育の授業で球技に取り組む際、「投げる・捕る」という基本的な運動技能が十分でない子どもが多く見受けられる。こうした子どもたちが基本的な運動技能を身につけていくことができれば、運動種目選択の広がりや、授業の深まりが期待できる。そのためには、運動技能を高めるのに最も適した年齢段階に、「投げる・捕る」動作を身につけていく必要がある。

そこで本研究では、幼稚部幼児、小学部児童を対象にし、球技の基本となる「投げる・捕る」運動技能を習得するための指導内容、方法について実践を通して検討していくことを目的とした。

幼稚部では、「転がる、はずむ」といったボールの特性に親しむ教材を使って遊ぶことや、大きさ、重さ、素材の違う色々なボールに戯れる経験をすることをねらいとした。また小学部では、ボールを「投げる・捕る」動作を身につけていくために、実際にボールを投げる（オーバーハンドスロー）、捕る（胸受け）の指導を行った。さらに、ボールを投げる動作に類似する活動を通して投げる「動き作り」をねらった授業を展開した。

一ヶ月のそれぞれの実践を通して、あまりボールに関心がなかった幼児が自分からボールで遊ぶ姿がみられるようになり、ボールを足で蹴る、滑り台から転がす、地面について遊ぶ等、ボールの扱い方にも広がりがでてきた。小学部児童は、ボールを投げるフォーム（顔の向きや視線、身体の向き、バックスイング、フォロースルー、体重移動）に変化が見られた。

幼児期のボール遊びは、単に運動機能の発達・向上のみならず、ボールを拾い集める、つかんで落とす、転がす、目で追うといった手先の感覚運動、目と手の協応動作といった生活習慣技能の基礎、社会性の発達の基礎、知的発達の基礎などにも深く関わっていることにその意義があるといえる。小学部段階の子どもの「投げる」動きづくりの指導を考えていくには、体育の時間だけでなく多くの遊びを経験することで身体運動感覚を養っていく必要がある。また、教員とのボールを使ったやりとりの中で、「上手く投げることができた」、「ボールを受け取ることができた」という成功体験を積み重ねていくことで、自信や意欲を深めていき「もっとやりたい」という気持ちを育てていくことが重要である。

今後は、それぞれの実践の内容や方法をより広げていくと同時に、その評価方法についても検討していく必要があるだろう。また中学部段階では、今回の小学部の実践にもあるような「目標となる運動に似通った動き」をどう配列させ

* School for children with Disabilities attached to Tokyo Gakugei University

** Tokyo Gakugei University (4-1-1 Nukui-kita-machi, Koganei-shi, Tokyo, 184-8501, Japan)

て実際の運動種目に活かしていくかについて考えていきたい。また高等部段階では、中学部までに経験した運動種目をもとに「どんな種目を、どのように楽しみたいか」といった種目選択を含めた学習の方法について深めていき、卒業後につなげていけるような実践を試みていきたい。